

2011 年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞受賞

暴力の時代における情念の浄化装置としての絵画

医学部 4 年 山田 悠至

はじめに

「山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。」¹と書いた明治の文豪が牧歌的に思えるほど現代人の心は怯え、傷つき、疲弊しているのではないか。他人の評価や視線を恐れ、自分の生き方を見失い、気がついたら経歴や肩書きに縛られて身動きが取れなくなり、「もう疲れた、仕事に行きたくない」とつぶやく。日々の生活は嫌気が差すほど平和な暴力に満ち溢れている。これが本稿の前提とする時代認識である。

そして平和な暴力に満ちた時代にあって、日常を浄化する絵画を生み出す松井冬子²の存在は異彩を放っている。彼女は東京藝術大学で日本画を学び、2007年に女性で初めて日本画研究の博士号を取得した新進気鋭の日本画家であり、NHK『トップランナー』（2010年8月28日放送）やNHK教育ETV特集『痛みが美に変わる時～画家・松井冬子の世界～』（2009年4月20日放送）など数多くのメディアに取り上げられた。作品は傷ついた女性や内臓をモチーフにして押し殺された痛みを残酷なほど緻密に描いており、一度観たら忘れられない独特の世界観は苦痛に満ちた甘美な恐怖に包まれている。そしてなぜか観ると救われる。創作の原点は個人の暴力体験にあり³、暴力を連想させるモチーフも存在する。しかし暴力による痛みが最終的なテーマではなく、作品は重苦しい日常にひび割れを起こし、その向こう側に広がる清浄な地平を予感させるのである。そこで松井冬子が東京藝術大学大学院時代に発表した作品を主な手がかりとして、暴力を通じて現代を描写すること、そして暴力の時代において彼女の作品がなぜ必要とされ、どのような機能を果たしているのかを考察することが本稿の目的である。

本稿の構成としては、第1章で現代社会における暴力の遍在を指摘し、第2章ではその暴力により人間が受ける痛み、特に物語化できない痛みこそが日常において人を慢性的に苦しめるという立場をとる。第3章では物語化できない痛みに対する人間の反応としての自閉と解離がともに主体を拡散させることを示し、第4章で自閉や解離を経て拡散した主体の情念⁴を松井冬子の作品が浄化するメカニズムを解明する。

1. 遍在する暴力

現代の日本社会がなぜ暴力に基づく松井冬子の作品を必要とするのかという問いの前提として、現代社会が暴力とどのように関わっているかを考える。まず暴力は人間なしには生起しない。自然の暴力という表現もあるが、それはハンナ・アーレントの言う force（強制力）に分類されるべきである⁵。すると暴力が人間なしでは存在しない以上、暴力は人間との関わりの中で問われるべきであり、人間との関わりにおける暴力は戦争のように露骨な姿で我々の眼前に現れる物理的暴力と、顕在化を拒む心理的暴力という二つの方向性が考えられる。ここでは現代の日本社会を捉える視点として後者の方向性を採用し、「暴力と

は主体の否定である」⁶と定義する。次に主体としての自己とは何かを明らかにする必要がある。「自己が自己として自らを自覚しうるのは、自己が自己ならざるものに出会ったときである」⁷と木村敏が言うように、自己は自己だけではわからず、他の人間を通じて初めて自己を理解するのであり、他者から離れば自己は消滅するため自己は本質的に社会的存在である⁸。フランスの哲学者ジャン・ポール・サルトルは他者に対して存在する自己を「対他存在」と表したが、その場合すでに存在する自己を他者と向き合わせて双方の相剋を論じる傾向が強いのに対して、本稿で扱う自己とは他者なくしては生まれえない自己である⁹。こうした立場から現代社会を眺めた時、暴力はどのように存在するだろうか。

ここで近年話題になった KY(K=「空気」、Y=「読めない」で KY=「空気読めない」人間の意)について考える。これは KY と名指しすることで空気を読めない人間を排除し、他の人間に周囲への配慮を強要する同質化圧力であるが、そもそも「読まなければならない空気」がどのような秩序かが判然としない。しかしこれには理由があり、KY という名指しが秩序(「空気」)を実体化するのであって、最初から存在する秩序に寄り添うための KY ではない。そして KY という名指しにより名指しされた人間以外が「そこに居られる」足場となる秩序(社会)が生成されるのである¹⁰。この排除の名指しは秩序からの逸脱者を生産するだけでなく、そもそも自己が位置づけられるべき社会が定かではない状況に置かれた若者たちが転倒した方法で「そこに居られる場所」である社会を確定する機能を持つ。そして KY という名指しにより社会性を剥奪された者は社会的主体の否定としての暴力を受けているが、名指しされた人間以外にも、KY という名指しなしでは存在の足場となる社会を生成できない点で社会的主体の否定の危機としての暴力に晒されている。この意味で現代の社会には暴力が遍在していると言える。

また KY 秩序のような顕著な例を挙げるまでもなく、社会の中に「ある」と前提される秩序は社会の成員たちの協働作業による産物であり、その秩序構築過程は成員にとって「ないも同然」で、常識の名のもとに自明化されている¹¹。したがって社会の中の「平凡」や「ノーマル」は「逸脱」や「異常」と同様に、ひとつの達成されるべき現象であり、決して「自然」で「当たり前」な状態ではない。「ノーマル」をノーマルな状態に保つための秩序構築は、マイノリティから社会での居場所を奪い、彼/彼女らを「見えない存在」に変えていく作業であり、暴力を伴う「透明人間化」と呼びうるのではないか。そしてこの秩序構築を最も大規模かつ効率的に実践しているのがマスメディアである。マスメディアは何を見せ何を見せないかを定めることで、誰に社会での居場所を与え、誰から居場所を奪うかを定める暴力装置であり、その決定にはジェンダー、人種、民族、国籍、年齢など様々な社会的条件が関与している。さらに社会での居場所を確保し、辛うじて透明人間化という暴力を回避した人間にも、マスメディアは暴力を浴びせかける。それはマスメディアが見せる者(社会での居場所を与える者)のうち誰をどう表象するかという暴力である。これは社会学者・見田宗介が「まなざしの地獄」¹²と表現したもので、マスメディアは一方では「服装、容姿、持ち物」などの具体的な、他方では「出生、学歴、肩書き」などの抽象的な、しか

しともに人間の表層に位置する情報を曲解し、一方的に「ひとりの人間の総体」を規定するのであり、これは各人の実相を無視する点で主体の否定としての暴力と言える。社会の中で暮らす者は、自己に刻み込まれた特性が本人の自覚の有無に関わらず社会的記号として流通し、一方的に解釈される匿名の暴力的な視線に晒されているのである。以上の議論から、マスメディアに代表される社会は一方で人間の居場所を奪い社会から排除するという暴力を行使するとともに、他方では社会の内部の人間に対しても「まなざしの地獄」としての暴力的な視線として機能しており、社会には暴力が遍在していることが示された。そこで次章では、こうした社会の暴力により生じる痛みについて考える。

2. 物語化できない痛み

主体の否定としての暴力が生み出す痛みとは何であろうか。まず医学・生理学における痛みには急性疼痛と慢性疼痛がある。急性疼痛は身体のどこかに痛みの原因があり、その原因を取り除けば痛みも消えるが、慢性疼痛はその原因らしきものを取り除いても痛みがとれず発症のメカニズムは解明されていない。しかし最近の研究では過去の痛みの記憶が神経の中に痕跡として残っており、それがフラッシュバックのように現在の痛みとして想起される状態が慢性疼痛だと考えられている¹³。そしてこの慢性疼痛の考え方はフロイトの「死の欲動」という概念により心理的痛み¹⁴にも適用できる。フロイトは精神分析を行う中で、患者たちが重大な苦痛を体験したにもかかわらず、フラッシュバックや夢などの不随意の再体験を通して、繰り返しその体験に立ち返ろうとすることに気づき、この心理的痛みに向かう傾向を「死の欲動」と名付けた¹⁵。つまり主体の否定としての暴力は死の欲動を通して心理的痛みを惹起するのである。

次に死の欲動により慢性化する心理的痛みは物語化できない痛みであることを示す。第1に物語化できる痛みは解消するという考えがあり、精神分析の臨床は、「なぜ私はこの痛みを抱えているのか」という問いに対して「幼児期の不遇な体験のためにこの痛みは生じている」というひとつの物語を描くことで痛みを除去することである。第2に苦痛な体験のフラッシュバックや夢には「語り」や「前後関係」が伴わない、つまり物語性がない断片である¹⁶。以上の2点から慢性化する痛みは物語化できない痛みであることが示される。そして物語化が痛みを消すという前提に立てば、物語性がない苦痛な体験に回帰する慢性化した痛みとは、繰り返し想起して物語化することで体験をした当時は物語化が出来なかった痛みを解消しようとする働きだと考えられる。

最後に物語化が痛みを解消するメカニズムを示す。まず物語化が痛みの解消に必要な理由は、暴力による「痛みが被害者の生の文脈を破壊する」¹⁷からである。そして物語はそれが自分自身について語る自己物語¹⁸であっても本質的に他者に向けられた語りであり、文脈を破壊された体験の記憶が物語化され他者に受容されることで、語られた自己や自身の体験は他者と共有された現実となり¹⁹、自己は生の文脈を回復できる。これが暴力による生

の文脈の破壊を克服し、慢性化した痛みを物語化により解消するメカニズムである。

しかし、実際には暴力が遍在する現代社会は物語化できないままの痛みで満ち溢れている。そこで次章では、人間が物語化できない痛みに対してどのように振舞うかを、松井冬子が大学院時代に発表した作品を手がかりとして考える。

3. 自閉か解離か、そして自己拡散

現代社会は物語化できない痛みで満ちている。そして人間は物語化できない痛みに晒されると、孤立無援化し、恐怖に直面して無力化される²⁰。この時に心を保護する仕組みとして発動するのが自閉と解離である。通常人間は他者に対して「開かれて」おり、他者との対人関係の集積によって自己を構築している²¹。これが本稿で前提とする社会的存在としての自己である。しかし痛みが主観的現象であり客観的記述が不可能なこと²²が示すように、人間の経験の核の部分には他者と共有できないものがあり、この帰結として「自己と他者の間には厳密な意味での共通の尺度は存在し得ないのである。」²³この共約不可能性により、他者に対して自己を「開く」ことは自己構築に不可欠であると同時に、自己を侵害する他者の有害性が直接自己の内部に侵入してくる通路を開くことでもあり、自己を危険に晒す可能性を秘めている。そして心的暴力に遭遇して、自己を「開く」必要性よりも、自己が被る有害性の方が大きくなると、自己を他者に対して閉ざし、安全な領域へと自己を囲い込む自閉が行われる。

この過程を松井冬子の作品から読み取ることができる²⁴。まず着目するのは彼女の東京藝術大学の学部の卒業制作である『世界中の子と友達になれる』(2002,絹本着色,裏金箔,雲肌麻紙,181.8×227.3cm)である。この作品は「度重なる受動²⁵と消極²⁶による病的興奮」を「少女、畸形化した藤、黒い帯状の雀蜂、赤児のいない揺り籠」に仮託し、「神経症、狂気、女性、墮胎、ヒステリー」の表象とすることで、緊張が狂気が変わる直前におこる崩壊の予兆のようなものを表現したという²⁷。背中を丸めて抜け殻のように立つ少女は、表面的には肉体的欠損はないように見えても、心的、感覚的にはきわめて不自由であり、赤児のいない揺り籠は墮胎を意味している。墮胎行為は自己の一部を破棄するという暴力であり、この少女は中絶の心的痛みにより崩壊しようとする精神の中で、揺り籠に入るはずだった赤児を探している。画面全体を淡く、灰暗く、寂しい色調が支配し、黒い帯状の雀蜂の大群は少女の狂気との戯れを暗示している。「世界中の子と友達になれる」というタイトルはまさに「絶対的に実現不可能な狂気のアイデア」²⁸であり、物語化できない痛みを惹起する暴力を生々しく表現している。では、その結果として自閉という選択をした生の有り様はどのような表象が可能なのだろうか。そこで次に松井冬子の『ただちに穏やかになって眠りにおち』(2004,紙本着色,168×408cm)に注目する。この作品は黒い海に入水自殺しようとしている白い象が他者との断絶を示しており、他者からの問いに答えず、外界から来るすべての働きかけを退け、無視し、

排除する様子を表現している²⁹。他者の存在が届かず、感情もなく、関係を求めない白い象は自らの精神世界に何重にも鍵をかけて自閉した様を象徴的に表現しているのである。

では暴力に対する人間の振る舞いは自閉だけだろうか。実はもうひとつの選択として解離があり、解離とは「人間の心における時間的、空間的な連続性の消失である。」³⁰ 生物は有害な異物を体内に感じると、それを外へ出そうとする自立的な排除機能が働くが、心の領域でも自己が望まない衝動やイメージが侵入すると拒絶反応が起き、その経験を時間的、空間的連続性の消去により切断し、自己とは別の人格として脇へ押しやる。松井冬子の『ややかるい圧痕は交錯して網状に走る』(2008, 絹本着色, 190×78cm)は自己の心臓や小腸が身体からもぎ取られ、ちぎれそうになりつつも辛うじて身体にぶら下がっている女の像であり、他者との関係が複数の自己を生み、それをコントロールすることの困難さを描いている³¹。

以上のように自閉や解離を選択することは、有害な他者から自己を守ろうとして全体的又は部分的に自己の社会性を放棄することであり、その結果生じる他者と共有されない記憶は現実か白昼夢かの確認さえできずリアリティに乏しい。そのため誰にも言えない痛みを抱え込むと現実と非現実の境界は曖昧になる。そして自己防衛としての社会からの退行は生への希求に基づくにも関わらず、生への希求が倒錯した位置に置かれることで社会的存在としての自己は損壊を被るのである³²。自己はひとつの中心からなる自己完結的な実体として身体に内在するのではなく、その都度の他者との関係の仕方が集まって生成し続ける³³ため、自閉や解離により他者との交流が欠落すると自己は奥行や深さを失い拡散し、世界の实在性としての現実も稀薄化する³⁴。暴力が破壊するのは生命や身体のみならず、まさに「人間の形」であり、そのイメージである。そして人間の解体が日常的に進行し、人が人であることが困難な状況が現代において出現している³⁵。松井冬子の『陰刻された四肢の祭壇』(2007, 絹本着色, 222×172cm)は自分の内臓をドレスのようにまとい幸福そうな笑みを浮かべる女の像であり、あるべき体内から乖離した内臓が衣服のように再度結合している。そして女は百合の花を手にして上下が入れ替わった背景の森を歩いており、「自己の肉体と外部環境の境界が不明瞭になり、自己の姿を外界に投影した」³⁶様子を描いたのだという。人間が対人関係の集積により自己を構築するという前提に立てば、自己の破綻はその基盤となる対人関係の破綻を表しており、それが自己の境界が不明瞭となり内臓のドレスをまとった女性像として表現されている。

松井冬子は「美術とは技術を伴ったパッションの記号化である」³⁷と定義する。そして芸術作品は個人の感覚を意味ある構図に組織化するものであり、作品には先行する現実が不可欠であると述べている³⁸。すると自己の表現の動機が暴力体験だとする松井冬子は、社会に遍在する暴力により物語化できない痛みを抱え込み、自閉や解離に直面している自身を含めた人間の内面を「先行する現実」と捉えているのではないかと。

自閉や解離の結果、社会での存在の足場を全面的又は部分的に失い自己が拡散し、社会に声を届かせることができず、痛みを嘆く声を押し殺すしかない人間の声なき声を、そして存在を代弁しているのではないだろうか。さらに暴力が遍在する時代にあつて、多くの人々が顕在的、又は潜在的に暴力に晒される中で、彼女の作品は時代の痛みを代弁する存在として必要とされているのである。しかし本当にそれだけであろうか。そもそも彼女自身も暴力に傷つき痛みを抱え込んだとすれば、なぜ彼女だけが他の傷つき社会での足場を失った人々とは異なり、足場を失うことなく社会において彼/彼女らの声なき声の代弁者でいられるのか。それを理解するには彼女の作品が果たす機能へと考察を進める必要がある。

4. 人型という情念の浄化装置

松井冬子の作品には女性の人物像が描かれている。これは女性である松井冬子が画中の人物像と自己を同一化して観る傾向があるからであり³⁹、作品に登場する人物像は動物の像も含めて全て松井冬子の自画像である⁴⁰。そこで動物も含めた人物像を「人の形」を与えられたものとしての人型とここでは定義する。すると彼女の作品を観る者は「他者現前化」と「自己顕在化」という二つの立場で画中の人型と向き合うことになる⁴¹。つまり鑑賞者が画中の人型と他者の立場で向き合い、自分の目で作品を観ると同時に画中の人型の目によって観られていると感じる他者現前化という立場と、鑑賞者が画中の人型に自らを重ね合わせて、それと同化し自分の分身を観ているように思う自己顕在化という二つの立場で作品を観るのである。

まず他者現前化の機能について考えると、痛みを抱き、他者との関係を断つことで自己が拡散した人間が画中の人型を観ることで、たとえその人型が特定の個人の肖像画だとしても、それが複数の対人関係の記憶を重ね合わせた集積体として鑑賞者に向き合う他者の様相を帯び、鑑賞者に他者を通して生成する社会的存在としての自己を回復させる。つまり鑑賞者の存在の基盤となる視覚的な体験装置として松井冬子の作品は機能しているのである。さらに社会での存在の足場を失った多くの人々が画中の他者、しかも自身と同じく暴力に苦しむ松井冬子が投影された人型としての他者を通して自己を再獲得することで、彼/彼女らには作品を起点とした共通の「新たな」社会が立ち上がり、暴力に苦しむ人々が自己を回復すればするほど、その「新たな」社会は拡がり、従来を覆い尽くす。すると松井冬子自身が暴力により自己を失いかけたとしても彼女は作品を通して社会と、しかも「新たな」社会と繋がり、「新たな」社会が従来を覆うという手段によって声なき声の代弁者でいられたのではないか。その意味で松井冬子の作品が現代に受容されることは暴力の蔓延する社会の一種の刷新であり脱皮であると言えるかもしれない。

次に自己顕在化の機能について考える。『完全な幸福をもたらす普遍的万能薬』(2006,絹本着色,59×58.5cm)の画中で苦悩から頭皮を掻きむしり皮膚が裂けてめくれた女性像や、

『浄相の持続』(2004,絹本着色・軸,29.5×79.3cm)で男性に対するコンプレックスあるいは憎悪から自らの腹を切り裂き赤児のいる子宮を見せびらかす女性像など松井冬子の作品には痛みを連想させるものが多い。これは暴力によって傷ついた者を表象しているのであるが、傷ついた姿は直接的な身体への物理的暴力を表しているわけではなく、美術という媒体を用いるため、心理的痛みも身体的な傷として表現した方が鑑賞者に伝わりやすいので敢えて身体的傷として描いていると松井冬子は述べている⁴²。そして傷ついた鑑賞者が画中の傷ついた人型に自己顕在化を通して向き合う時、距離を置いて傷ついた自己を見つめることで情念を浄化するカタルシス⁴³の心理的効果を人型は鑑賞者に与えるのであり、鑑賞者は心理的に自己の痛みから解放される。また現代社会に遍在し、松井冬子自身も創作の動機とする暴力とは、一度生じると様々な形態を取りながら循環して暴力の連鎖を生み出す。この暴力の連鎖は次から次へと人間を傷つけ被害を拡大させていき、生成した暴力は消すことができない。では人間は永遠に暴力に傷つき苦しむ以外に方法はないのであろうか。そこでひとつの解決法があることを松井冬子は示している。つまり、暴力の連鎖は止められないとすれば、その暴力を連鎖させる相手を他者にすれば暴力による被害は拡大するが、暴力を連鎖させる相手を自己にしたらどうであろうか。しかも生身の自己ではなく画中の人型を通して立ち上がる自己顕在化としての自己に暴力を連鎖させるのであり、松井冬子が暴力に傷つき、痛みを抱えた人型を描く理由がここにある。つまり彼女は傷ついた人型を描くことで画中の人型を、そして人型により立ち上がる自己を傷つけ痛めつけているのであり、画中の人型を通して自己顕在化としての自己に暴力を連鎖させ続けているのである。そうすれば暴力を芸術という異次元へと転移することができ、その芸術の次元の中に暴力の連鎖を封じ込めることができる。そして二度と暴力の連鎖が芸術の次元から日常の次元に戻ってこないようにするために松井冬子が描いた作品が『ただちに穏やかになって眠りにおち』であると考えることができないだろうか。この作品は物語化できない痛みを抱えた人間が自閉を選択する様を表現したと前章で解釈したが、さらに深層には松井冬子が制作の意図を「どうすることもできないこの支配を死滅させ、弔うために」⁴⁴この作品を生んだと述べるように、数え切れない人々が抱え込まざるを得なかった暴力、そして暴力による痛みを全て背負い込んで黒い海に静かに沈んでいく白い象は、芸術の次元に転移できた暴力が二度と日常の次元に現れないように、また暴力による痛みを自らに重ね合わせて死滅させるために、外界からのあらゆる働きかけを退け、無視し、排除して入水自殺をしているのである。そしてこれが暴力により生じた情念を日常の次元から芸術の次元へ、そして黒い海の底へと死滅させる浄化装置、松井冬子の生み出した現代における情念の浄化装置としての芸術の機能なのである。

松井冬子の生み出した情念の浄化装置には二重の意味がある。ひとつは彼女が描いた人型、しかも傷ついた人型に対して、暴力による痛みを抱えた人々が自己顕在化を通して向き合うことで、傷ついた自己を離れて見つめカタルシスの効果により痛みから人々を解放するという意味での情念の浄化である。そしてもう一つは、痛みを生み出す暴力の絶対量

を減少させるために、彼女が描く画中の人型を通して立ち上がる彼女自身に暴力を連鎖させ、その暴力を彼女の自画像である白い象に託して黒い海の底へ沈め、芸術の次元に封じ込めるという意味での情念の浄化である。つまり彼女は人型の他者現前化により鑑賞者に存在の足場を与え自己を回復させると同時に、人型の自己顕在化により鑑賞者を痛みから解放し、自己の背負った暴力を芸術の次元に封じ込めることで情念を浄化する機能を果たしており、人型に対する他者現前化と自己顕在化が果たすこれらの機能は表裏一体なのである。

おわりに

絵画の根源的な成り立ちは平面上の構図ではなく、画面の手前にいる鑑賞者と、画面の向こう側との相関関係に基づいている⁴⁵。また絵画は真理の顕現化であり、人間が世界の真の開示性と向き合う場所である⁴⁶とすれば、現代という時代に必要とされる松井冬子の作品の中には現代の真理が顕現化しており、それと向き合うことで現代という時代の息苦しきの真相を垣間見られるのではないかと考えた。今日の日本は「豊かな成熟した社会」と言われる一方で、年間3万人を超す自殺者⁴⁷、社会生活そのものから降りたり、社会生活へ入ることをためらう若者、そして居場所がなく生きづらさを抱えて自傷する少女に見られるように言いようのない重苦しい空気に支配されている。この「生きながら死んでいる」現代という時代が何なのかを松井冬子の作品に発想の手がかりを得て考察したのが本稿である。

最後に本稿の作成にあたり貴重な資料を提供して頂いた松井冬子様、成山画廊様に心より感謝致します。ありがとうございました。

注

- 1 夏目漱石 『草枕』7頁。『草枕』において引用箇所後は、「(引用箇所) 住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。」と続き、夏目漱石が指摘する「人の世の住みにくさ」に対する「画」の役割を考察することが本稿に通底する広義の問題意識である。
- 2 日本画家・松井冬子は1974年生まれで静岡県森町出身。1994年に女子美術大学短期大学部造形学科を卒業。その後、東京藝術大学美術学部絵画科にすすみ日本画を専攻、2007年には同大学大学院美術研究科博士後期課程美術専攻日本画研究領域を修了した。
- 3 松井冬子 「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」『博美181号』(東京藝術大学、2007) 3頁。
- 4 ここで情念とは暴力によって生じたものであり、自己の精神を自ら制御できなくなる心的状態であるとする。

- 5 谷徹、今村仁司ら 『暴力と人間存在』 19 頁。
- 6 ミシェル・ヴィヴィオルカ 『暴力』 100 頁。
- 7 木村敏 『人と人との間』 14 頁。
- 8 清水学 『思想としての孤独』 28 頁。
- 9 中村英樹 『〈人型〉の美術史』 179 頁。
- 10 古茂田宏、中西新太郎ら 『21 世紀への透視図』 8 頁。
- 11 清水学 『思想としての孤独』 142 頁。
- 12 見田宗介 『まなざしの地獄』 (河出書房新社、2008)
- 13 A.Vania Apkarian,Marwan N.Baliki,Paul Y.Geha “Towards a theory of chronic pain”
Progress in Neurobiology 87(2009) 81-97
- 14 本文では医学・生理学的痛みと区別するために敢えて「心理的痛み」と記したが、痛みには体温や血圧のような計測機器は存在せず、患者にとって「痛い」と感じる経験全てが痛みなのであり、痛みは心身の主観的な経験である。そのため医学・生理学的痛みと心理的痛みには境界がないと考えるべきである。
- 15 熊谷晋一郎、大澤真幸 「痛みの記憶/記憶の痛み」『現代思想 2011 年 8 月号』 40 頁。
- 16 谷徹、今村仁司ら 『暴力と人間存在』 43 頁。
- 17 信田さよ子 「訪れる痛みと与える痛み」『現代思想 2011 年 8 月号』 112 頁。
- 18 イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズが現代社会における自己アイデンティティを「再帰的プロジェクト」、すなわち自分自身でたえず作り出していかなければならないものだと論じたが、ここではこのプロジェクトが必ず自己物語の聞き手としての他者を必要とするという立場を採用している。
- 19 浅野智彦 『自己への物語論的接近』 11 頁。
- 20 谷徹、今村仁司ら 『暴力と人間存在』 43 頁。
- 21 中村英樹 『〈人型〉の美術史』 57 頁。
- 22 稲原美苗 「痛みの表現」『現代思想 2011 年 8 月号』 81 頁。
- 23 山内志朗 『天使の記号学』 22 頁。
- 24 ここで「松井冬子の絵画が物語化できない痛みをも表現している」という筆者の主張に対して「絵画とは観る者に何らかの意味を伝えるため、全ての絵画は「物語化」した情報を提供している」という反論が予想される。これは松井冬子論にとって極めて本質的な問題である。なぜなら松井冬子の絵画とは美術を含め様々な手段での物語化を試みつつも、その物語化が困難であった「物語化できない痛み」を何とかして物語化しようとする試みであり、その意味で「物語化できない痛みを表現する」という筆者の意図は「物語化できなかった痛みを松井冬子が表現した」と言い換えるべきかもしれない。
- 25 受動は(他者の意図にかかわらず)他者から一方的に被る精神的な攻撃性のことである。
- 26 消極は自我が消失している心理状態のことである。
- 27 松井冬子 画集『松井冬子Ⅱ』「世界中の子と友達になれる」作品解説。

- 28 同上書「世界中の子と友達になれる」作品解説。
- 29 同上書「ただちに穏やかになって眠りに落ち」作品解説。
- 30 上野千鶴子(編) 『脱アイデンティティ』138頁。
- 31 松井冬子 画集『松井冬子Ⅱ』「ややかるい圧痕は交錯して網状に走る」作品解説。
- 32 古茂田宏、中西新太郎ら 『21世紀への透視図』14頁。
- 33 中村英樹 『〈人型〉の美術史』13頁。
- 34 井上俊、上野千鶴子ら 『自我・主体・アイデンティティ』61頁。
- 35 松井冬子「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」20頁。
- 36 松井冬子 画集『松井冬子Ⅱ』「陰刻された四肢の祭壇」作品解説。
- 37 松井冬子「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」33頁。
- 38 同上書 7頁。
- 39 同上書 36頁。
- 40 DVD『痛みが美に変わるとき 画家・松井冬子の世界』
- 41 中村英樹 『〈人型〉の美術史』7頁。
- 42 DVD『痛みが美に変わるとき 画家・松井冬子の世界』
- 43 カタルシスという言葉はアリストテレスが著作『詩学』でギリシャ悲劇の本質を説明するために用いた言葉で、一般的には抑圧された感情を外部に表出して心の緊張を解消すること。ここでは距離をおいて自己の分身を見据えることで自己が自己に対して意識的に他者になり心理的に自己から解放されることを意味する。
- 44 松井冬子「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」49頁。
- 45 中村英樹 『〈人型〉の美術史』72頁。
- 46 渡邊二郎 『芸術の哲学』108頁。
- 47 厚生労働省ホームページ <http://www.mhlw.go.jp> (2012年1月7日現在)によれば、日本の自殺者数は統計のある1898年(明治32年)の5932人から2010年の31690人まで増加傾向にあり、過去10年は3万人強で推移している。また人口10万人あたりの自殺死亡率も近年だけでも1965年の14.7から2003年の25.5まで倍増している。

ここで本稿の題名『暴力の時代における情念の浄化装置としての絵画』にもあるように現代を暴力の時代と特徴付けるのは不自然であり、時代を問わず人間の社会には主体の否定としての暴力は存在するという主張もある。これに対しては、本稿では現代にだけ暴力が存在すると主張したいわけではなく、現代を暴力、しかも主体の否定としての暴力という視点で眺めた場合に、現代という時代がどのように描写できるかを考察したいのであり、上記の自殺死亡率が近年において倍増という現象からもわかるとおり、現代の描写に暴力という視点を採用する妥当性は十分存在すると考えている。

参考文献

- 浅野智彦 『自己への物語論的接近』(勁草書房、2001)
- 稲原美苗 「痛みの表現」『現代思想 2011年8月号』(青土社、2011)
- 井上俊、上野千鶴子ら 『自我・主体・アイデンティティ』(岩波書店、1995)
- 上野千鶴子(編) 『脱アイデンティティ』(勁草書房、2005)
- 木村敏 『人と人との間』(弘文堂、1972)
- 熊谷晋一郎、大澤真幸 「痛みの記憶/記憶の痛み」『現代思想 2011年8月号』
- 古茂田宏、中西新太郎ら 『21世紀への透視図』(青木書店、2009)
- 清水学 『思想としての孤独』(講談社、1999)
- 谷徹、今村仁司ら 『暴力と人間存在』(筑摩書房、2008)
- 中村英樹 『〈人型〉の美術史』(岩波書店、2011)
- 夏目漱石 『草枕』(岩波書店、2006)
- 信田さよ子 「訪れる痛みと与える痛み」『現代思想 2011年8月号』
- 松井冬子 画集『松井冬子 I・II』(河出書房新社、2008)
- 松井冬子 「知覚神経としての視覚によって覚醒される痛覚の不可避」『博美 181号』(東京藝術大学、2007)
- ミシェル・ヴィヴィオルカ 『暴力』(新評社、2007)
- 見田宗介 『まなざしの地獄』(河出書房新社、2008)
- 山内志朗 『天使の記号学』(岩波書店、2001)
- 渡邊二郎 『芸術の哲学』(放送大学教育振興会、1993)
- DVD『痛みが美に変わるとき 画家・松井冬子の世界』(NHK エンタープライズ、2008)
- A.Vania Apkarian,Marwan N.Baliki,Paul Y.Geha “Towards a theory of chronic pain”
Progress in Neurobiology 87(2009)
- 松井冬子公式サイト <http://matsuiufuyuko.com/> にて作品の一部が閲覧できます。(2012年1月7日現在)